氏　　名　福井辰彦（ふくい たつひこ）
学位(専攻分野)　博　士（文　学）
学位記番号　文博第 366 号
学位授与の日付　平成 18 年 5 月 23 日
学位授与の要件　学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻　文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目　明治漢詩の比較文学的研究

論文調査委員　（主査）教授 大谷雅夫　教授 木田章義　助教授 大槻　信

論文内容の要旨

明治時代，特にその前半期において漢詩文は，多くの専門雑誌が発行され，新聞各紙に漢詩欄が設けられるほどの流行を見た。

では，その明治漢詩の研究はどのような現状にあるのだろうか。

明治漢詩の流れを大まかに概観するには，大江敬香「明治詩壇評論」「明治詩家評論」（ともに『敬香遺集』（一九二八）所収），木下周南『明治詩話』（一九四三），明治文学全集『明治漢詩文集』（一九八三），三浦叶『明治漢文学史』（一九九八）などの先行研究がある。しかし，個々の詩人や作品についての研究となると，一部の例外を除けばほとんど進んでいない。

ここで言う「例外」とは，永井荷風，前田愛らによって反近代の文学者として評価された成島柳北，恋愛を情熱的にうたいあげ，漢詩に近代を持ち込んだとされる中野逍遙，作家研究の一部として漢詩が取り上げられる夏目漱石，森鷗外などである。これらの詩人・作家については先行研究も多い。

しかし，これらの「例外」を除けば，明治漢詩について個々の詩人や作品を具体的に分析するような研究は，数えるほどしかない。殊に明治漢詩壇の主流を形成した，森春濤・槐南父子とその一派の漢詩文については，ほとんど研究がなされておらず，文学史に大きな空白部分が残されていると言うことができる。ここ数年，揖斐高「明治漢詩の出発―森春濤論」（一九九九），新日本古典文学大系明治編『漢詩文集』（二〇〇四）などの業績が見られるが，それ以前の研究らしい研究としては，中村宏氏の数点の論考や，前田愛「枕山と春濤」（一九六八），入谷仙介氏の『近代文学としての明治漢詩』（一九八九）所収論文を挙げ得るくらいであった。春濤・槐南は伊藤博文をはじめとする明治政府の顕官たちを後援者に持ち，その門下にも官員が多かった。そのため，いわゆる「近代文学」の範疇外であるのはもちろん，「反近代」ですらないと見なされ，研究対象から外されてきたものと思しい。

本書が試みるのは，この空白部分を埋めること，すなわち今日では読まれることもまれであろう春濤・槐南派の漢詩とはどのようなものであったのか，具体的に明らかにすることである。

その方法として本書では，比較文学的手法を取ることにした。ある詩人の詩について，中国文学（特に詩）のどのような部分から何を摂取しているかを，典拠指摘を中心とした実証的検証によって明らかにし，その詩人の詩風を浮き彫りにする，という手法である。それは，何を典拠として利用するかということが，漢詩表現の質を決定する大きな要因であり，詩風の違いも中国詩との類似を捉えて表現されることが多いからである。また，明治漢詩の特徴として必ず指摘されながら，その実体が明らかにされていない清詩の影響について，具体的に検討するためにも有効である。

「第一章　明治漢詩研究の偏向―永井荷風『下谷叢話』をめぐって―」では，幕末・明治期の江戸漢詩壇の動向を知るために，今日でもしばしば参照される永井荷風『下谷叢話』について論じ，改めて明治漢詩研究の課題を確認することにした。

永井荷風『下谷叢話』は，数度に亘る改稿を経ている作品であるが，特に初出『下谷のはなし』から春陽堂版『下谷叢

話』（初版）への改作によって，本作の枠組みは決定したということができる。

本章では，竹盛天雄，前田愛両氏の先行研究を踏まえつつ，春陽堂版への改作が，反俗の詩人・大沼枕山と，時代に棹さした鷲津毅堂や森春濤らとのコントラストを明確にするためのものであったことを明らかにした。

また，本作における荷風の評価が，前田愛氏に引き継がれたことで，春濤らの詩業を研究の対象外へと追いやる結果となっている明治漢詩研究の現状についても批判的に言及した。

「第二章　牛鬼蛇神の詩―宮崎晴瀾とその周辺―」では，槐南門下の四天王の一人とされた宮崎晴瀾を取り上げた。

宮崎晴瀾は，＜妖怪体＞とも評される怪奇趣味に富んだ独特の詩を詠じ，中唐の詩人・李賀になぞらえられた詩人として文学史の概説書や事典類にその名が見える。しかし，その詩がどの様なものであったのか，作品を挙げて紹介されたことはなく，李賀の影響についても具体的な検討はなされていない。

本章ではまず，晴瀾のいわゆる＜妖怪体＞の詩を，注釈・訳を付して紹介した。晴瀾の詩は，李賀詩の語句・表現・イメージを借りながら独自の世界を創造し，描き出している。時に漢詩としては破綻寸前の，晦渋な表現に陥る欠点はあるものの，十分に魅力的であり，一種の浪漫主義文学として評価し得るかも知れない。

さらに，本田種竹，依田学海，森槐南など同時代の漢詩人たちにも李賀愛好の傾向が見られることを示した。晴瀾詩は，こうした流れの中から生まれた一つの達成であり，孤立した存在ではなかった。

「第三章　宮崎晴瀾と張船山―明治漢詩における清詩受容の一斑―」，「第四章　森槐南と陳碧城―槐南青少年期の清詩受容について―」では，春濤・槐南派への清詩の影響に着目した。春濤・槐南派は清詩を新たな詩風の手本と位置付け，その影響を強く受けたとされる。春濤は清詩の中でも，張船山，陳碧城，郭頻伽の三人を清三家として，その絶句を編集した『清三家絶句』を刊行した（明治十一年）。そこにはこの三者を新詩風の典型として提示しようという意図が含まれていたと考えられる。第三章，第四章でそれぞれ張船山，陳碧城を取り上げたのはこのためである。

第三章ではまず，宮崎晴瀾が張船山の詩句を典拠として用いた例など，明らかな摂取の跡を指摘した。

さらに，怪奇趣味，李賀愛好といった詩の内容に関わるレベルでの類似が見られることを論じ，晴瀾のユニークな詩風の成立には張船山の影響が関係している可能性が高いと結論付けた。

第四章では，父森春濤のあとを継ぐ形で明治漢詩壇の中心人物となった森槐南が，青少年期，陳碧城の詩を受容しながら自身の詩風を形成していったことについて論じた。

槐南が詩を学び始めた当初目にしたのは，陳碧城の艶体の詩を多く含む『頤道堂詩外集』であった。槐南は深い情愛を持ち，時にはそれに溺れてしまう「情種」の詩人としての陳碧城に憧れ，自身艶体詩人となっていった。

しかし，槐南は明治政府の官僚となり，結婚した頃から詩風を改めようとし始める。その際にも陳碧城の詩を読み直し，自らの陳碧城のイメージを書き換えようとしていることが，槐南「読陳雲伯頤道堂集」から読み取れる。

「第五章　明治漢詩と王士禛―『新文詩』所収作品から―」でも清詩の影響について論じた。

王士禛の詩は，明治期に流行したとしばしば指摘されるが，その流行の内実に言及したのは揖斐高氏が初めてと言ってよく，しかもこの揖斐論文も具体性を欠くという問題を残していた。そこで，森春濤が発行していた漢詩文雑誌『新文詩』所収作品のうち，＜王士禛風＞と評されたものを対象に，王士禛詩の影響について検討した。

その結果，王士禛詩を典拠として用いた実例を指摘することができた。

また，＜王士禛風＞と評された詩の特徴として，もや，夕闇，雨などで視界を朦朧化する描写法があり，これが王士禛の若年，揚州時代の詩風の特徴に一致することを指摘した。

以上のような研究によって，＜妖怪体＞＜清詩風＞といった評言だけが知られていた春濤・槐南派の詩風を具体的に示すことができた。また，明治の漢詩人たちが，それぞれに中国文学の影響を受けながら，自身の詩風を育てていったことも明らかとなった。これまで紹介されることがほとんどなかった明治漢詩のいくつかを，口語訳・注釈を付した読みやすい形で提供したことも本書の成果として良かろう。

もとより明治漢詩の一斑を窺ったにとどまるが，未開拓の分野における第一歩としての役割は果たし得ているものと考える。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

明治文学は，『明治文学全集』についで近年は『明治の文学』『新日本古典文学大系　明治編』などの叢書も次々と刊行され，その研究はいよいよ隆盛に向かいつつあると言ってよい。しかし，にもかかわらず，今日，明治文学の研究といえば，『小説神髄』『若菜集』以後の新様式，新思潮の作品に関心が偏りがちであり，漢詩文は，例外的な二三の詩人の作品を除いて，いまだほとんど顧みられていない状況である。

漢詩文は，およそ明治三十年頃までは，その専門雑誌が数多く刊行され，新聞各紙にも漢詩欄が設けられるまでに，ひろく人々に支持され，知識人の表現意欲を満たすべき器であり続けていた。西洋文化の影響を受けた近代文学がいまだ未成熟な段階にとどまっていた当時，散文では近世以来の低俗な戯作が主流を占め，韻文では和歌，俳諧は月並調に低迷したままであり，新たな表現を生み出す活力を失っていた。その中にあって漢詩文は，知識人たちの真摯な文学的欲求を満たしうるほとんど唯一の表現手段だったのである。漢詩文の世界を空白部分としたままに明治文学史，近代精神史を記述することの不可能は，言うまでもないであろう。

従来，例外的に研究されていた明治の漢詩人は『柳橋新誌』の成島柳北であり，異色の詩人中野逍遙であった。それらの作品は，本格的な漢詩であるよりも，むしろそこに近代的意識の萌芽が見いだされる文学として大きな関心が寄せられたものであった。また漱石鷗外などの漢詩も，近代小説家の余技としての詩作品として相応の注目を集めるものであった。それに対して，本論文は，明治漢詩壇の大御所とされた森春濤槐南父子とその門下の作品を中心に取りあげる。春濤槐南は江戸時代の漢学の伝統を継ぎ，その詩は深い学識に基づいて典拠を縦横に用い，時に難解を極める。難解な上に，しかも近代的な情緒を汲み取ることは難しく，研究者の関心を引くことは絶えてなかった。しかも，春濤槐南は伊藤博文以下の明治政府高官に親昵し，それらの支持によって漢詩壇に覇を唱えることができたと考えられ，それが反俗を好む近代的な文学観にも抵触して，文学者としての軽侮を招きがちであった。本論文が敢えてそのような春濤槐南の詩作品を考察の対象としたことは，そのことだけで，他に類を見ない関心のありかた，独創的な方法として刮目に値する。

本論文は，春濤槐南の詩について，その典拠を調査することによって，中国清代詩の受容のあり方を考証する。厖大な量の詩作品の，複雑に典拠を踏まえた表現をときほぐす作業は非常に困難なものであるが，本論文は，敢えて言えば愚直なまでの態度でそれをおし進める。その結果，本論文が明らかにし得たのは，第五章で，森春濤が清の王士禛の詩の影響を濃厚にうけること，第四章で，森槐南が同じく清の陳碧城の，特に艶体の詩を受容しながら自身の詩風を形成していったこと，また第二章では，森派の門人，宮崎晴瀾が中唐の李賀の詩の影響を受けつつ怪奇趣味に満ちた独特の詩を作ったこと，そして第三章では，晴瀾が清の張船山の詩を受容したことについて，張船山が李賀を好んだことがそれに関わるだろうことなどである。総括すれば何ということもない結論のようであるが，一方でいわゆる「近代文学」が創りだされる中で，明治の詩が，李賀詩，清詩の影響の下に独自の風を生み出して行く過程が，具体的にまた鮮やかに描きだされたのである。明治の文学は，未開拓の分野を拓くこの研究によって，総体として捉えることが初めて可能になるだろう。本論文は，新たな近代文学史研究の礎となるべきものである。

本論文になお望むべくんば，明治漢詩における怪奇趣味，浪漫主義を指摘した上で，それが同時代の他の文学とどのように関わるかの分析，また，森派の詩は江戸末の詩風をいかに継承し，また近代とどう関わったか等の考察が欲しい。明治漢詩は，それ自体閉じたものとして研究されるべきではなく，怪奇趣味はたとえば上田秋成のそれとどう関わるか，浪漫艶情は明治歌壇のそれとどのように関連するかまで考察は拡げられるべきであろう。論者の学の今後の発展に期待したい。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成十八年四月七日，調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。